

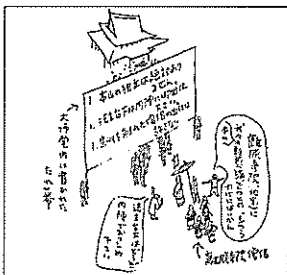
## 点描

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動—

No.23

1979  
昭和54年

教区宗門非常事態收拾対策委員会発行『緊対だより』第1号に掲載されたイラスト

教団問題／公議公論を求めて／  
分裂報恩講(中)

教区宗門非常事態收拾対策委員会では、教団問題のマスコミ報道が事実を伝えていないことから、正確な情報を伝えるべく、『緊対だより』を一九八〇年(昭和55)1月に第1号を発刊した。その特集は前年の「分裂報恩講」である。

この報恩講には、独立本願寺を称する人による自主運営を阻止すべく、全国の僧侶・門徒・学生が自主上山した。

しかし、その警備は多くの議論を生起させた。大谷専修学院では9時間に及ぶ職員会議を行い、職員の見解が11対2対3に分かれた。警備についた北海道教区の住職は、「私自身、保安警備に自主上山したが、単に非常事態対策本部の方針に双手を挙げて賛成というわけではない。それどころか、座り込みをして離脱した人たちの出仕を阻止することが報恩講の義になかなかの事なのか、という問いを持ちつつ出かけた」と『北海真宗』に寄せている。

竹内政之助氏(第5組樹教寺同朋の会推進員)は、『緊対だより』第1号に警備の裏舞台を生々しく報告している。

竹内氏が警備したのは、離脱寺院住職が法主をとりまいて出仕することが予想される「お成り廊下」。「法主はお通りください、離脱寺院は阻止する」という警備方針に戸惑いつつ、皆でスクラムを組んで対応する予行練習も行った。

報恩講前日の20日午後、その時は突然やってきた。離脱寺院の僧侶と黒ジャンパーの男たちが、扉の施錠を取り外そうと飛び込んだ。また、ガラス戸の破壊行為があつて警察が介入する事態も生じた。午後5時で交代となったが、夜には「本願寺が離脱組に占拠されそうだから至急集まれ」との連絡が入るといった総動員体制で報恩講に突入した。

翌21日、法主と宗務総長のトップ会談も時間切れでまともならなかったとの情報が入る。お成り廊下での攻防になるだろうと予測されたが、法主は離脱寺院出仕者とともにタクシー・バスで乗りつけ、参拝席から内陣に出仕。

その夜には、離脱寺院の僧侶と

本願寺の腕章をつけた人々が乗り込み、「あなた方はなぜお上の通られるこの廊下に毛布まで持ち込んで座らねばならないのか」との桐喝も受けた。宿に帰るどころではない。ここは一步も譲れないと覚悟を決めた。

夜の警備は緊張の連続で疲労のため倒れる人も出た。不穏な空気にも包まれた暗く長い一日であつたという。

翌22日の晨朝からは、若手僧侶や警備員の阻止により内陣に出仕するには至らず、法主が参詣席や広縁で勤行するという異例の事態が続いた。出仕者の半数以上は北海道の僧侶と聞かされて肩身の狭い思いをしたと述べられている。

参詣した門徒は、法主、離脱寺院の勤行が終了するまでじつと背を向け動くことはなかった。その勤行が終了すると、外陣に出仕した宗派の僧侶とともに正信偈同朋唱和の音が堂内に響きわたった。

一体感の回復を感じさせた同朋唱和の感動や、拡声器で「御法主はお入りください。離脱寺院は帰れ」と叫び続けられた姿は、多くの人に「宗門とは何か」という課題を突きつけた。(速水 馨)